

名所の再興にみる景観再構築と景色の持続に関する研究*

-近世以降の嵯峨野を対象として-

Reconstruction of Meisho and Continuation of the Scenery in Sagano

山口敬太**・出村嘉史***・川崎雅史****・樋口忠彦*****

By Keita YAMAGUCHI**・Yoshihumi DEMURA***・Masashi KAWASAKI****・Tadahiko HIGUCHI*****

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

嵯峨野は北と西の山にかぎられ、南に流水がある緩傾斜地という蔵風得水型の地¹⁾である。平安時代より歌枕の地として、そして『源氏物語』や『平家物語』、『嵯峨日記』などの文学作品に描かれ、「もののあはれ」や無常を表現するにふさわしい場所として知られた嵯峨野であるが、それらの名所・旧跡の多くは小倉山山麓に集まっていた。嵯峨野には多くの名所が密度高く集合し、固有の領域を作り上げた。

現在の嵯峨野がその歴史的景観を持続させてきたのには、様々な人々の努力と工夫があつてのことであつた。本稿では江戸から明治にかけての、有志たちの篤志や努力による名所・旧跡の再興に着目し、人々による景観再創造におけるデザインとその背景となる考えを、事例分析によって明らかにすることを目的とする。

この分析によって、地域の文脈を継承するような地域づくりや景観形成、それに関わる人々の取り組みに対して示唆を与えると考える。

(2) 研究の位置づけ

名所の景観保全における人々の取り組みに着目した研究として長谷川の研究²⁾がある。嵯峨の景観に関する研究には西川³⁾や土屋⁴⁾の研究があり、これらは嵯峨の景観に史実や文学作品が与えた影響について述べているが、その後の名所と再興については述べられていない。嵯峨について人々の景色の持続のための関わり方、土地の文脈をいかした景観デザインについて詳細に分析した

ものはなく、本研究はその点で意義があると考えられる。

2. 名所の存続と廃絶

江戸後期から明治にかけてのこれらの名所の衰退や廃絶の後、主に明治から戦前にかけて廃絶した社寺が遺跡として再興される例が目立った。それらは小規模ではあつたが、嵯峨野の質の高い景観の領域を維持するために、重要な要素となつていた。それらの名所再興運動の担い手となつたのは、大寺院ではなく、地元住民を中心とした有志らであつた。さらに、再興事例のなかには文学作品の描写にあわせて景観がつくられるなど、特徴的な景観形成がうかがえるものがみられた。

表-1 嵯峨における名所の再興事例

	所縁	再興時期	再興の立役者
祇王寺	平家物語の旧跡	明治 28 年	嵯峨の有志、北垣国道、祇王村民
滝口寺	平家物語の旧跡	昭和初期	長唄の杵屋佐吉
厭離庵	定家の山荘・時雨亭の遺跡	1736 年 明治 34 年	冷泉家 大村彦太郎
落柿舎	向井去来、芭蕉・嵯峨日記の旧跡	1770 年	井上重厚、小松喜平治、永井瓢齋ら
宝篋院	楠木正行の旧跡	大正 5 年	天龍寺管長、実業家・川崎芳太郎
直指庵	黄檗宗の大寺	幕末 明治 32 年	村岡局 北嵯峨の有志ら
遍照寺	平安期の巨刹	江戸寛永	別の地に小堂を再建
観空寺	嵯峨天皇創建	江戸初期	後水尾天皇 今の本堂は住友家による修復
壇林寺	平安・壇林皇后創建	昭和 39 年	祇王寺の東に再建
野宮	齋宮の潔斎の地、源氏物語の遺跡	維新直後 明治 6 年	吉見資鎮が私費を投じ管理 村舎となる

本稿では、表-1にみられる名所の再興のうち、祇王寺、落柿舎、厭離庵について、その再興時の景観デザインについて述べる。そこから現在の地域づくり、市民参加のデザインに役立つための知見を導く。

3. 祇王寺の再興による景色の持続

(1) 祇王寺の再興

『平家物語』の旧跡として世に広く知られる祇王寺は数百年の間、浄土宗の尼寺であつた(図-1)。しかし、明治維新後は往生院も祇王寺も住持する者もなく廃れて

*キーワード：景観、空間整備・設計

**学生員，工修，京都大学大学院工学研究科

(京都府京都市左京区吉田本町，TEL075-753-5551，Keita.

Yamaguchi@t23x1791.mbox.media.kyoto-u.ac.jp)

***正員，工博，京都大学大学院工学研究科

(TEL075-753-5123，demu@art.mbox.media.kyoto-u.ac.jp)

****正員，工博，京都大学大学院工学研究科

(TEL075-753-5122，kawa@art.mbox.media.kyoto-u.ac.jp)

*****正員，工博，京都大学大学院工学研究科

(TEL075-753-5121，higuchi@urban.mbox.media.kyoto-u.ac.jp)

いた。明治元年の『京都一覽図画』には祇王寺の記述はなく、遺跡としての塔のみが記されている⁵⁾。明治 20 年に富岡鉄斎は祇王寺を訪れた際、その荒廃を嘆いた⁶⁾。



図-1 絵巻に描かれた祇王寺、「祇王絵巻」⁷⁾

そして明治 28 年、当地の有志井上与一郎・小松喜平治・小林吉明ら、並びに当時の村長野路井孝治が、大覚寺門跡大僧正楠玉諦師と再興を図った。その際に、京都府知事北垣国道は、祇王が水利を興した事実に深く称賛し、自らの別荘の一棟を畳建具と共に寄附し、また滋賀県野洲郡祇王村の村人たちはかつて祇王が水利の便をはかった恩恵に感じて大いに力を尽くし、その旧跡に「清雅古樸なる草庵」（清らかで上品であり、古びて飾りけのない草庵）を結んだ⁸⁾。そして明治 35 年に真言宗大覚寺派として再興された。再興後の祇王寺の敷地配置を図-2に示す。

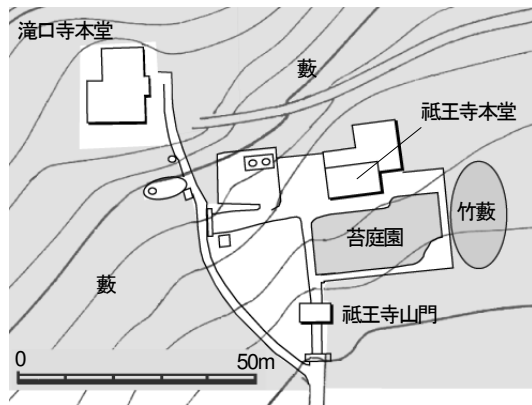


図-2 祇王寺境内の敷地配置
(等高線:2m間隔, グレー塗部:山林)

祇王寺の再建計画当時の勸財書には、当時の再興の理由が書かれている。それによると、祇王寺について「嵯峨一境の名勝となり、四方の人客来り尋ね参詣する者絶ゆる事なし(中略)大覚寺門跡大僧正楠玉諦師、深く古跡の荒廃を悲み、祇王尼の高躅こうちよくを永存せん事を謀る爰に年あり、信徒の者追々増加し本寺再建の希望已むべからざるに至る」とあり⁹⁾、祇王寺再建にあたり、宗教上の理由だけでなく、むしろ名勝・旧跡としての廃絶を惜しみ、その再興を意図していることが分かる。

『京都名勝記』(明治 36 年)には、再興直後の景観が「境内静寂にして堂門等瀟洒とし、頗る畫巻物中の景に

似たり」¹⁰⁾と書かれている。絵巻物が実際の景観創造に与えた影響は不明であるが、再興後の祇王寺の景観と、絵巻物に描かれた景観の間には多くの共通点があった。

(2) 祇王寺の再興による景色の持続

祇王寺の再興は、嵯峨の住民達を中心とする人々の手によって「深く古跡の荒廃を悲み」行われた。景観分析の結果、その再構築された祇王寺の景観について、その数寄屋風の建築は小規模かつ古風であり、祇王の住んでであろう草庵を連想させ、「境内静寂にして堂門等瀟洒とし、頗る畫巻物中の景に似たり」という、古くからの景色のイメージに合致したものであった。祇王寺周辺において体験されるスケール感・囲繞性は、樹木をそして山の存在を感じられるものであり、平家物語で描かれた隠棲生活とも合致することがわかった。また小倉山の景物としての楓は、古くからの歌枕の地としての小倉山のイメージと合致する。苔庭園という新しい意匠が生まれたが、苔の視覚的触感や色彩は寂びたる景色を連想させる。江戸時代の頃から祇王寺は『平家物語』の旧跡として存在していたため、その景観は物語のイメージとの整合性を感じられるものであることが重要であった。そしてそれを満たすような景観創造が行われ、祇王寺において、その景色は持続したと考えられる。

4. 落柿舎の再興による景色の持続

(1) 落柿舎の再興

落柿舎は、芭蕉門下十哲の一人に数えられる向井去来が、元禄初年(1688)に自ら命名した別荘である。芭蕉も元禄二年(1689)の初訪問以来三度訪れ、この嵯峨の地の山や川、名所古跡の風流な有様を喜んだ。元禄 4 年(1187)には四月十八日から五月四日まで滞留し、その間に『嵯峨日記』を記し、以降去来と芭蕉の旧跡として広くその名が知られる。しかし、去来亡き後には、この落柿舎を管理する者がおらず、舎は取り壊された。今の地にある落柿舎は後人が弘源寺の跡地に再興したものである。

去来の死後 66 年経った明和 7 年(1770)に、去来の通家であり、その風雅を慕っていた井上重厚が「多くの年月を経て所の人だに其跡をしらずなりにき。さしもこの地に、定家卿の時雨の亭、去来の落柿舎と、風流のすきものにしられたる古跡のかたなくなりけるを嘆く事年久し。」と、落柿舎のすたれたのを惜しんで今の地に再興することとなった¹¹⁾。この際に移築した建物について、「小堀遠江守政一朝臣三畳之茶室也。舊卜向井氏宅ニ在り、後于嵯峨天龍寺境地ニ移ス」¹²⁾とあり、再興当時の落柿舎は三畳ほどの茶室と、大変小規模であった。

注目すべきなのが再興時の敷地選定における動機である。以前の落柿舎が立地していた場所を知る人は重厚を含め当時いなかったといい、重厚は落柿舎の再興の地の選定にあたり、去来の詠った俳句を手がかりにした¹³⁾。

『落柿舎日記』によると、「嵐山にむかひ野々宮に隣て、しかも柿の古木数株今もありて『梢はちかき嵐山』の吟のその景致にまぎるべくもなければ」とあり、元来の落柿舎の景観を詠んだ去来の歌の描写に合う景色が得られる敷地を選んでいることが明らかである。再興前後の場所から見える山の容姿を比較すると(図-3)、再興後の落柿舎からの方が、嵐山の山容が捉えやすいことがわかり、山の見えが敷地選定に影響を与えたと考えられる。

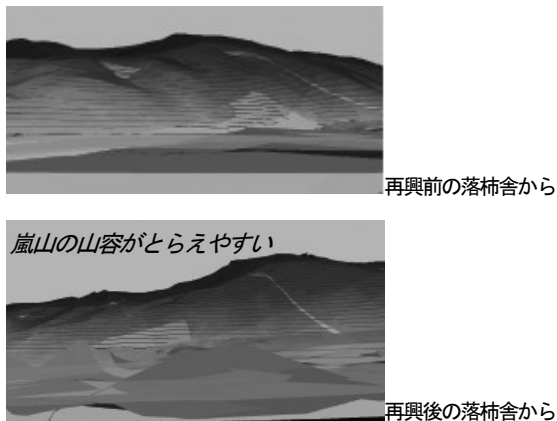


図-3 再興前後の落柿舎からの嵐山の容姿

(Arc Scene で出力：GISデータマップ作成 神山藍，水谷社志)

その後、落柿舎の土地が天龍寺の塔頭弘源寺の所有であったので、落柿舎は弘源寺の所有となり、同寺の老僧の隠居所である捨庵となった。さらにその後も落柿舎の五代から七代まで渡って、落柿舎号を継承するために、一時の仮庵が下嵯峨北之町や車折社傍、あるいは渡月橋畔などにつくられた¹⁴⁾。さらに、明治18年の頃弘源寺が売却して取り壊しにかかる時、小松喜平治がこの遺跡のなくなることを惜しみ買収した。しかし、またしばらくの間にして管理者不在の状態が続いた¹⁵⁾。昭和10年になって小松家が落柿舎を処分することになったのを聞いた永井瓢齋らが、元の持ち主よりこれを買取り、修復を行った。その際、落柿舎保存会を結成し、昭和に入ってから敷地を拡張し、次庵の建設も行った。



写真-1 現在の落柿舎と舎前の畑

(2) 落柿舎再興による景色の持続

このように、重厚による再興以来、捨庵として利用した弘源寺、石外などの落柿舎の代々の管理者・俳人達、遺跡の廃絶を惜しみ俳諧道場として復興とした小松喜平治、永井瓢齋や工藤芝蘭子らの落柿舎保存会と、様々な人々がその景観の維持に力を傾けた。それぞれの立場は様々であったが、少なくとも名だたる旧跡を後世に残そうという共通の意志があった。このような市民達の名所の維持に向けた努力がなければ、その景色は失われていたといえる。

その中でもやはり最も重要であるのは重厚による再興であるが、去来・芭蕉の愛した落柿舎の面影を再び作り出し、それを後世に残そうとした。その際に重厚が去来や芭蕉の残した文学作品を手がかりに、敷地計画、建築計画と、そのイメージに合った景観創造を試みている点が特徴的であると考えられる。

そして現在もこの地のアイデンティティともなる「嵐山の眺め」が得られ、芭蕉の「落柿舎は昔の主の作れるままにして、處々頹破す。中々に作りみがかれたる昔のさまより、今のあはれなるさまこそ心とどまれ」¹⁶⁾を連想させる落柿舎の古趣あふれる数寄屋風建築の維持と、さらに周囲の田園と藪の維持が、落柿舎周辺の景色の持続に大きな役割を果たしていることが明らかとなった。

5. 厭離庵の再興による景色の持続

(1) 厭離庵の再興

a) 定家の山荘と時雨亭

和歌の家・冷泉家の遠祖藤原定家は嵯峨に山荘を営み、市井から離れて自然豊かな嵯峨の景色を楽しんでいた。

冷泉家伝来の説によると、時雨亭とは元来関東の豪族・宇都宮頼綱の山荘、中院山荘の名称であったという¹⁷⁾。定家の草庵に隣接して広大な中院山荘を築いたことは『明月記』にも記されている。中院山荘はのちに定家の嫡男為家の所有となり、為家はここで晩年を過ごした。小倉百人一首は『明月記』に書かれているように、中院山荘の襖に張る色紙のために、定家が古今の歌人百人の歌を選び、書いたとされ¹⁸⁾、そのため、中院山荘は小倉百人一首の選定の地として、世に広く知られた。

b) 冷泉家による江戸中期の厭離庵の再興

江戸初めにはこの山荘は廃れて幾年もの年月が経っていたが、庵の再興前から定家もしくは為家塚があり、それが名所巡りの際に訪れる対象となっていた¹⁹⁾。元文元年(1736)の頃、荒廃していたこの地を冷泉家が修理し、1772年より天龍寺派鹿王院の末庵とした。当時書かれた『厭離庵由来書』には、「今はこみちをなす所となれり。かくいちじるしき跡とはいへど、五百とせの星霜を経ぬれば、わづかに残れる礎を求め、もとの野辺の草を

かりふきて、此庵を結ぶ」²⁰⁾とあり、遺跡を惜しんだ冷泉家の人々が僅かに残っていた礎をもとに庵を結んだ由来が書かれている。

c) 明治の大村彦太郎による厭離庵再興

冷泉家による再興の後、また年月を経るにつれて柱も傾き雨漏りがするなどしているうちに無住となり荒れるがままとなっていた。京都白木屋・大村彦太郎氏がこれを歎き、明治34年に資金を投じて仏堂・庫裏を改築し²¹⁾、明治の元勲山岡鉄舟の娘素心尼を迎えて住職として再興した。三世の常覚尼は茶道に専念した。そして大正末年に厭離庵庫裏の東北部に茶室を岡田永斎の設計により増築し²²⁾、それを時雨亭と呼び、歌道・茶道両道を盛んにした。本堂は昭和の建設である。その後台風によって本堂が倒壊したが、常覚尼と克泉尼が協力してこれを復興した²³⁾。

(2) 厭離庵再興による景色の持続

このように、定家と所縁のある冷泉家、数寄者の民間人であった大村によって、定家の山荘は寺院として再興された。三世の常覚尼が茶道に専念したため、時雨亭は茶室としてつくられた。そのため、大正末につくられた藁葺の時雨亭と、同じく藁葺の待合は数寄屋風の建築様式で建てられた。このように再興後の本堂や時雨亭、待庵の増築には数寄屋風のデザインを取り入れ、山門や垣、アプローチ空間の意匠なども伝統的な意匠を取り入れている。これは管理者の思想によるところが大きく、管理者が歌や茶などをする風流者であったことも景色の持続に大きく関わった。また現在、厭離庵と墓との間は小さな公園となっているが、これは遥拝所の前に建物が建築されないよう崇拝者が買収し、公園にして中院町に寄附したという²⁴⁾。これにより厭離庵と為家塔の間に緩衝地帯ができ、周辺一帯の景色の持続が可能であった。

6. まとめ -嵯峨の事例から学ばれること-

古くから名所の集合として歴史的環境を形成していた嵯峨にとって、以上に述べたような名所の再興は、嵯峨のアイデンティティの継承・強化という点で非常に大きな役割を果たした。その際の景観創造の担い手は、地元住民が主であった。この運動の背景としては、名所の景観再生をもってその土地の記憶を継承することで、住民ら自身のアイデンティティの感覚を支えようとする気持ちが大きかったと考えられる。

実際の再興の流れとしては、多くの事例において経済的に余裕のある人々が支援をし、住民と協働で名所の再興を行っていた。景観創造の際のデザインの採用にあたっては、史実だけでなく物語や歌、日記などの記述が景観創造に大きな影響を与えていた。再興の担い手たちは

歴史的な文脈の継承に対する意識が非常に高く、過去の美的意識に基づいて形づくられたもの一失われたものを含む一に敬意を表し、出来る限り過去の文脈を読み取ろうとした。つまり、デザインの際に規範となる景色は、嵯峨という土地の過去の文脈の中にあった。

とはいえ、単に過去に形づくられたものの景観上の復興が目的であったわけではなく、再興された旧跡を使いこなす態度がみられた。例えば落柿舎は俳諧道場として、寺院である厭離庵は茶室の建設を経て歌道・茶道を盛んにした。寺院である祇王寺は苔庭園の整備や楓の植栽によって、もののあはれともいえる美的性格をより強めた。

このように過去の文脈を重視し、その上で時代の要求に応える新たな意匠を加えていたため、その景観もそれまで培われてきた過去の文脈を裏切らない形となった。このような努力と考え方があってはじめて、嵯峨という地がもつアイデンティティは継承され、その景色は持続してきたのである。

このような先人たちの工夫は、歴史的環境を有する地域の景観整備に対して改めて示唆を与えると考える。

参考文献

- 1) 樋口忠彦：景観の構造、技報堂出版、1975、p114
- 2) 長谷川成一：失われた景観 一名所が語る江戸時代-、吉川弘文館、1996
- 3) 京都市都市計画局編：「嵯峨野の歴史的風土と町なみの形成」、近畿地方の町なみ1、2003
- 4) 土屋敦夫：「文学に表現された嵯峨野」、前掲 近畿地方の町なみ1
- 5) 京都一覽図画、京都大学所蔵、1868
- 6) 京都新聞社、富岡鉄斎展 図録、1985
- 7) 小松茂美編：平家物語絵巻 巻第1、中央公論社、1990
- 8) 堀永休編：嵯峨誌、臨川書店、1974、p.133
- 9) 前掲『嵯峨誌』、p.133
- 10) 京都市編纂：新撰京都名勝誌、京都市役所、1915、p.395
- 11) 西馬門人三浦若海：「落柿舎去来先生事実」、去来先生全集、落柿舎保存会、1982、p.605
- 12) 前掲「落柿舎去来先生事実」、去来先生全集、p.605
- 13) 井上重厚：「落柿舎日記」1904、前掲『去来先生全集』、p.535
- 14) 保田与重郎：落柿舎のしるべ、落柿舎、1978、p.34
- 15) 前掲『落柿舎のしるべ』、p.34
- 16) 松尾芭蕉：「嵯峨日記」、井本農一校注・訳、松尾芭蕉集、小学館、1972、p.390
- 17) 嵯峨教育振興会編：『嵯峨誌 平成版』、嵯峨教育振興会、1998、p.103
- 18) 前掲『嵯峨誌』、p.98
- 19) 黒川道祐：「近畿歴史記 嵯峨行程」、1680、駒敏郎ら編、史料京都見聞記1、法蔵館、1991、p.50
- 20) 厭離庵由来書、前掲『嵯峨誌』、pp.114-115
- 21) 岡田孝男：京の茶室 西山北山編、学芸出版社、1989、p.57
- 22) 前掲『京の茶室 西山北山編』、p.57
- 23) 前掲『嵯峨誌』、p.101
- 24) 京都新聞 2005.1.24 付